

サッカー元日本代表
日本プロサッカー選手会名誉会長

中山雅史

Masashi Nakayama



サッカーのJリーグを黎明期れいめいぎから盛り上げ、日本代表としても数々の記録を残した中山雅史氏。昨年十二月に第一線から退くことを発表した時、多くの人々が全身全霊でプレーするこれまでの彼の姿を思い起こしたところだ。ワールドカップ・フランス大会で、歴史的な日本代表初ゴールを決めた後、骨折しながらプレーを続けた姿は今も語り草だ。記録にも記憶にも残る名選手に、少年時代からこれまでの歩みを振り返っていただいた。

すべてをサッカーに捧げる

高いレベルを目指し、次々に湧き出る欲求

——昨年末、第一線から退かれることを発表された後、数多くのメディアで中山さんの姿を拝見しています。この間の生活の変化はいかがですか。

中山 慣れないと言うか、非常にそわそわしている感じはありますね。毎日、朝起きると、「これでいいんだろうか」という感じですよ。リハビリは今も続けているんですけどね。従来はリハビリの過程でも、早く寝て、起きて練習して、帰って休養して、また早く寝て……と決まった生活リズムで過ごしてきました。それが今、こういう形になってからは、いろいろな仕事をいただいですごくありがたいんですが、さまざまなことが不規則に起こってくるわけです。今までは体を動かす仕事だったのが、今度は口を動かすことが仕事

になってきて、そこに対する慣れがない。そのなかでも自分のやることを精一杯やっているつもりですけど、なかなか落ち着かないですね。

——リハビリを続けられているとのことですが、それに臨む気持ちはいかほど同じですか。

中山 気は楽です。これまでは「早く復帰しなければ」という思いや「グラウンドに出てどう動けるか」といった不安が頭をよぎる中でのリハビリでした。でも今は「試合に絶対出なきゃいけない」ということもないですから。

——もともと、サッカーは何歳で始めたのですか。

中山 地元、静岡県藤枝市のスポーツ少年団のチームに所属したのが、小学校四年生のときです。それまでは、サッカーと野球を交

互にやっているという感じだったのですが、自分にはサッカーのほうが向いているかなと思ってチームに入りました。

——その頃から将来はサッカーを職業にしようと思われたのですか。

中山 いや、考えてなかったです。「大きくなったらプロのサッカー選手になりたい」と小学校の卒業文集とかには書きましたけど、当時はまだJリーグはありませんし、プロサッカーリーグといえは海外のものでしたから、サッカー選手というのは非現実的な夢でしたね。それこそ「将来はウルトラマンになりたい」というのと同じくらいのレベルですよ。

——それでは、本格的な大会に出てみたいと思われたのはいつ頃ですか。

中山 同じ頃にたまたまテレビで中学生のサッカーの選抜大会を見て、こんな大会に自分も出たいと

思いました。その思いが最初の目標になって、小学校、中学校とがんばったらそこに行き着いた。東海地区の選抜チームに僕も選出されて、その全国大会に出ることができたんです。

——大会での結果は？

中山 優勝できました。別の中学校から来ていた同級生に武田（修宏氏）（注1）もいましたから。武田は小学生の頃から超有名で、中学三年の時のその全国大会でもフォワードで点をとりまくって、注目されていましたね。

僕は、地元の藤枝東高校に進学してからは全国高校サッカー選手権出場を目指し、二年生の時にそれをクリアして全国でベスト四という成績をおさめることができました。その後、静岡県選抜に入っで国体に出たいと思い、三年生の時に出場できました。ただ、僕は藤枝東高校ではフォワードをやっていたのですが、県選抜では清水



なかやま・まさし●1967年静岡県生まれ。静岡県立藤枝東高校から筑波大学を経て90年にヤマハ発動機サッカー部（後のジュビロ磐田）に入部し、長年チームキャプテンを務める。日本代表としてフランスW杯（98年）、日韓W杯（02年）にも出場した。その後、度重なるケガに苦しみ、10年にコンサドーレ札幌に移籍。12年末に第一線を退くことを発表した。Jリーグ最優秀選手賞（MVP）1度、得点王2度、ベストイレブン4度受賞。通算最多得点（157得点）、年間最多得点（36得点）、1試合最多得点（5得点）、最多連続ハットトリック（4試合）の記録も持つ。国際Aマッチは53試合出場21得点。フランスW杯のジャマイカ戦で、日本サッカー界初のワールドカップでのゴールを決めた。

東高校から来ている怪物の武田が同じポジションで丸かぶりですから、ストッパーとして出場してました。相手チームのセンターフォワードをマークして守備をする、まるつきり逆のポジションです。

——フォワードのポジションへのこだわりはなかったのですか。

中山 武田というスーパースターを目の当たりにして、「自分が上のレベルを目指していくには、フォワードよりディフェンスなかな」と思っていました。大学時

代にユース日本代表のメンバーに入った時も僕はディフェンスで、井原（正巳氏）（注②）とセンターバックを組んでいたんです。上のレベルに行けるなら自分はどこでもやる、そこで結果を出せばいいんだと、そんな気持ちでいました。

——今お話し頂いた頃の気持ちは、出場する大会のレベルがどんどん上がり、そこで優勝することが何よりの喜びといった感じでしょうか。

中山 優勝するのが一番ですけど、まずそのレベルに行きたい

な、そういう大会に出られるレベルに自分を持っていきたいなと考えていました。その中で、もちろん負けたくないという気持ちは強いですから、優勝を勝ち取りたい。だけど、優勝すれば満足かというのと、そんなことはなくて、次の欲求が湧き出てくるんです。それを満たすと、また次の欲求が見えてくる。自分の欲求を次々と満たすために、次は何をしなければいけないか、どう努力しなければいけないかという、その連続でやってきたんです。

——その努力の過程と成長の過

サッカー人生における二つのターニングポイント

——藤枝東高校卒業後、筑波大学を経てヤマハ発動機サッカー部に入ります。

中山 進むべき道の選択はいつも自分で決めてきました。大学の選択も、ヤマハへの入社も、発足当初のJリーグへの参加が見送りになった後のヤマハへの残留も、全部自分の判断で決めました。

——筑波大学の二年の頃から本職のフォワードとして活躍され

程がうまく重なっていったということでしょうか。

中山 そうですね。とりあえず結果もついてきてくれましたので。上のレベルに行つては優勝できたという感じで、ラッキーだったと思います。いろいろな成功体験や喜びも得られたので、また次に向かう活力が湧いたのかなと思いますね。

（注①）元サッカー日本代表。Jリーグ通算九四ゴール、Jリーグベストイレブン一回。現在はサッカー解説者。

（注②）元サッカー日本代表。Jリーグベストイレブン五回、アジア年間最優秀選手一回。現在は柏レイソルヘッドコーチ。

ていますが、井原さんが大学の同期でしたね。

中山 井原は大学二年で日本代表に入っていました。僕も学生日本代表や日本のB代表には選出されていましたが、同期の井原がトップのレベルで戦っている、そのレベルを僕も体験してみたいという気持ちが強かった。サッカーをやっている以上、日本代表に入つて、ワールドカップに出たい、そ

ういう気持ち、意識がすごく強くなっていたね。

——九〇年に初めてヤマハから日本代表入りし、九二年にも代表選出されます。

中山 ヤマハが発足当初からのJリーグ参加を逃してしまいました。自分がとっては日本サッカーリーグ（JSL）^(注3)で活躍することが代表への近道だと思っていました。そこで日本人トップのゴール数を上げることができて、当時、日本代表を率いていたオフト監督（ハンス・オフト氏）^(注4)が代表に呼んでくれたんです。九三年にはオフトの下でワールドカップ出場をかけて、アジア予選も戦った。結局、日本はワールドカップには行けなかったけど、ヤマハのチームが衣替えしたジュビロ磐田は九四年にJリーグに昇格することができたんです。

——その後、Jリーグで輝かしい成績を残されますね。MVP一回、得点王二回。通算一五七得点は、今も歴代最多記録です。ワールドカップにはフランスW杯と日韓W杯の二度、出場を果たしました。そうした中で、特にご自身

の記憶に残っているゴールはありますか。

中山 よく「一番印象に残っているゴールは何か」とか「ベストゴールはどれか」とか質問されるのですが、「これだ」と決められないですね。それぞれが自分自身を成長させてくれたゴールですし、いろいろな成功もあるんですけど、失敗体験のほうが多いわけで、むしろそっちのほうに記憶に残っています。

ただ、自分のサッカー人生の中で一つのターニングポイントとなったと思うゴールはあります。日本代表が初めて国際大会で優勝した、九二年のダイナスティカップ^(注5)決勝の韓国戦。両の中での試合で、一対〇で負けていたんですけど、ラモス^(瑠偉)^(注6)さんから来たボールを、デイフェンスをすり抜けるようなかたちでトラップできて、すごくいい位置にボールを置けた。その時、前を向いた僕の目には、ゴールとゴールキーパーしか入っていないわけです。周りの喧騒^{けんそう}とか音も聞こえなくて、周りには何か霧^{もや}がかかったような状態で、ゴールとキー

パーしか見えない。いつもだったらしい切りシュートを打つところを「キーパーがあそこにいるなら、その左手の先を狙えば入るじゃん、サイドキックで流し込めばいいじゃん」と、すごく冷静に蹴って決めたんです。決めた後は半狂乱だったんですけども（笑）、蹴った瞬間は本当に落ち着いていて、集中できていた。このプレーが僕の中ですごく自信になった。その後JFL^(注7)でも代表でも、自分に自信を持って臨めるようになったのです。その意味で大きなターニングポイントになった。

さらにさかのぼって、高校時代にもそうした意味合いを持つゴールがありました。藤枝東高校の二年生の時、全国高校サッカー選手権大会静岡県大会決勝戦で東海大第一高校（現在の東海大学付属翔洋高校）と当たった。試合開始後三〇分間、もう押されっぱなしで、フォワードの僕がハーフライン付近でみてみると、ものすごいシュートをバンバン食らって、何とか入れられずに耐えているという状態でした。これは五対〇くらいで負けるかなと思ってい

たら、ボールが味方からポイントと相手の裏側に出て、僕が相手ディフェンスとの競争に勝ってシュートを打ったら入ったんです。それを契機に、結局三対一で勝って全国大会出場を果たし、全国三位にされた。それで自信が付いて、その後のいろいろな道が開けていったように思います。あのゴールがなければ、今の僕はなかったかも知れない。あれもまた、ひとつのターニングポイントだったと思います。

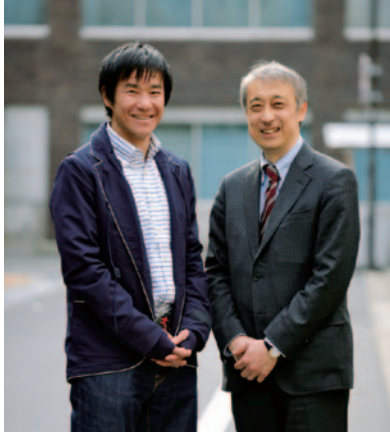
(注3) 一九六五年から一九九二年まで存在した日本のサッカーリーグ。一九九二年三月二十九日の最終節をもって廃止され、日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）とジャパンフットボールリーグ（JFL）へ発展解消されたこととなった。

(注4) オランダ生まれ。一九八二年にヤマハのコーチ、一九九二年に日本代表監督に就任。一九九四年からジュビロ磐田などの監督を歴任。

(注5) 東アジア四カ国・地域のナショナルチームによる国際大会。現在の東アジアカップ。九二年に中国で開催された第二回大会では、日本代表が海外の国際大会で初優勝を果たした。

(注6) ブラジル生まれ。元サッカー日本代表。Jリーグベストイレブン二回。現在はビーチサッカー日本代表監督。

(注7) ジャパンフットボールリーグ。一九九二年から一九九八年まで開催され、日本フットボールリーグに継承された。



未熟だったからこそ、長い現役生活が送れた

——中山さんの得点シーンを振り返ると、いつもなぜかこぼれ球やパスの転がるところに詰めていて、そこへ体ごと飛び込みながらゴールに押し込んでいた、という印象があります。

中山 ゴール前に飛び込むことが自分の仕事だと思っていたし、もうしなきゃという前に体が動いているんです。周りが「うわっ、危ない」と思うところでも、恐怖を感じる前に体を投げ出しちゃう。それができなければ僕じゃない、できるから試合に出られるんだと思っていました。

ゴール前に詰めて、チャンスに出くわす確率を上げるためには、そこへ愚直に、根気よく何回も顔を出すことです。同じことを何回も繰り返すからこそチャンスが来る。ボールに出合うことが偶然じゃなく必然になるんです。僕自身、器用なタイプではありません。「泥臭い」とか言

われても、そのプレーをやり続けるしかなかった。

——しかし、ギリギリの局面でも体を投げ出すプレースタイルは、つねにケガと隣り合わせでした。手術を一〇回も経験しています。それでも、また試合で怖がらずに飛び込んでいけるのは本当にすごいと思います。

中山 怖がっていたらできませんし、そんなに怖いとも思いませんでした。試合に出たい、プレーしたい、サッカーをしたいという気持ちのほうがまさるわけです。恐怖心とかケガへの思いは、サッカーをやれた時点で消えてしまいます。

リハビリをしているときは地味ですし、すごく長く感じますから、こんなやつてられないよと思うときもありました。でも、そう思いながらやっても、「よし、やるぞ」と思いながらやっても、時間は変わりませんから、「よし」のほうで絶対効果があると思うんです。だから、そういう気持ちでリハビリをしよう。よし、ここ

から復帰したら俺はすごい」とか、「こんな地味なことしてるけど、カメラが撮っていたらカッコいいぞ」って、いつも自分を鼓舞してましたね。

——プロサッカー選手として現役生活は二〇年以上。その中で中山さんの特徴は三〇歳を過ぎてから活躍されたことです。数々の記録も三〇代で打ち立てました。

中山 最初が低すぎたんですよ。だから皆さんの目には三〇代から飛躍的に上昇したみたいに見えるでしょう。

ただ、最初が未熟だったから、僕は長くやれたという気もしません。スタートが低くても、志は高いところに持っていましたから、そこに近づこう、少しずつでも上に行ければいいと続けてくれた。

——今は、プロ生活でやり残したことはない、と。

中山 いえ、やり残したことからなんです。だから「未練たらたら」受けていても、俺、走ってなくていいのかなと思います。

——一年後にはブラジルW杯が控えています。日本代表は五回目的

出場を目指しています。

中山 一昔前の「ワールドカップに行きたい」から「出て当たり前」になり、今は「勝つためにどう戦うか」になってきました。日本代表はより高いレベルを求められて大変だけど、がんばってもらわないと日本のサッカー界が盛り上がりません。選手たちに注文をつけるつもりはありませんが、やっぱり代表は特別なものだし、誇りを持ってピッチに立つてもらいたい。責任やプレッシャーなんて当たり前です。それを感じて戦えるのは本当に幸せなことなんです。日本代表というものに強い思い入れを持って、戦ってもらいたいなと思います。そういう戦いをみせることで、日本人誰をも元気にできる。サッカー日本代表はそういう役割を担っていると思います。

——日本代表の活躍もそうですが、本日は中山さんのお話からたくさん元気をいただきました。ありがとうございます。

（聞き手／情報サービス局長（取材当時、鮎瀬典夫）